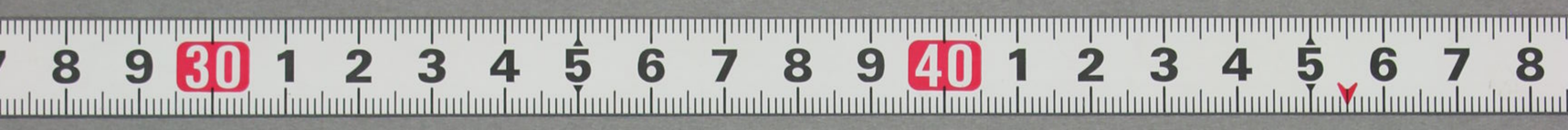
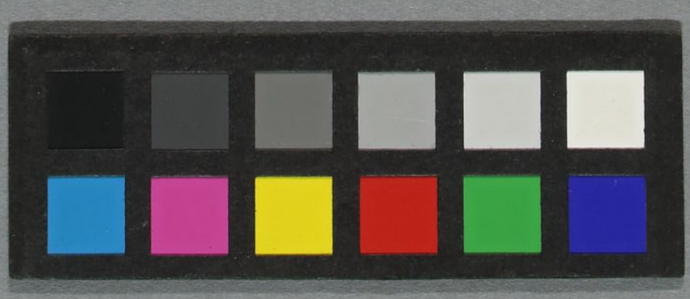


~13
3842
3



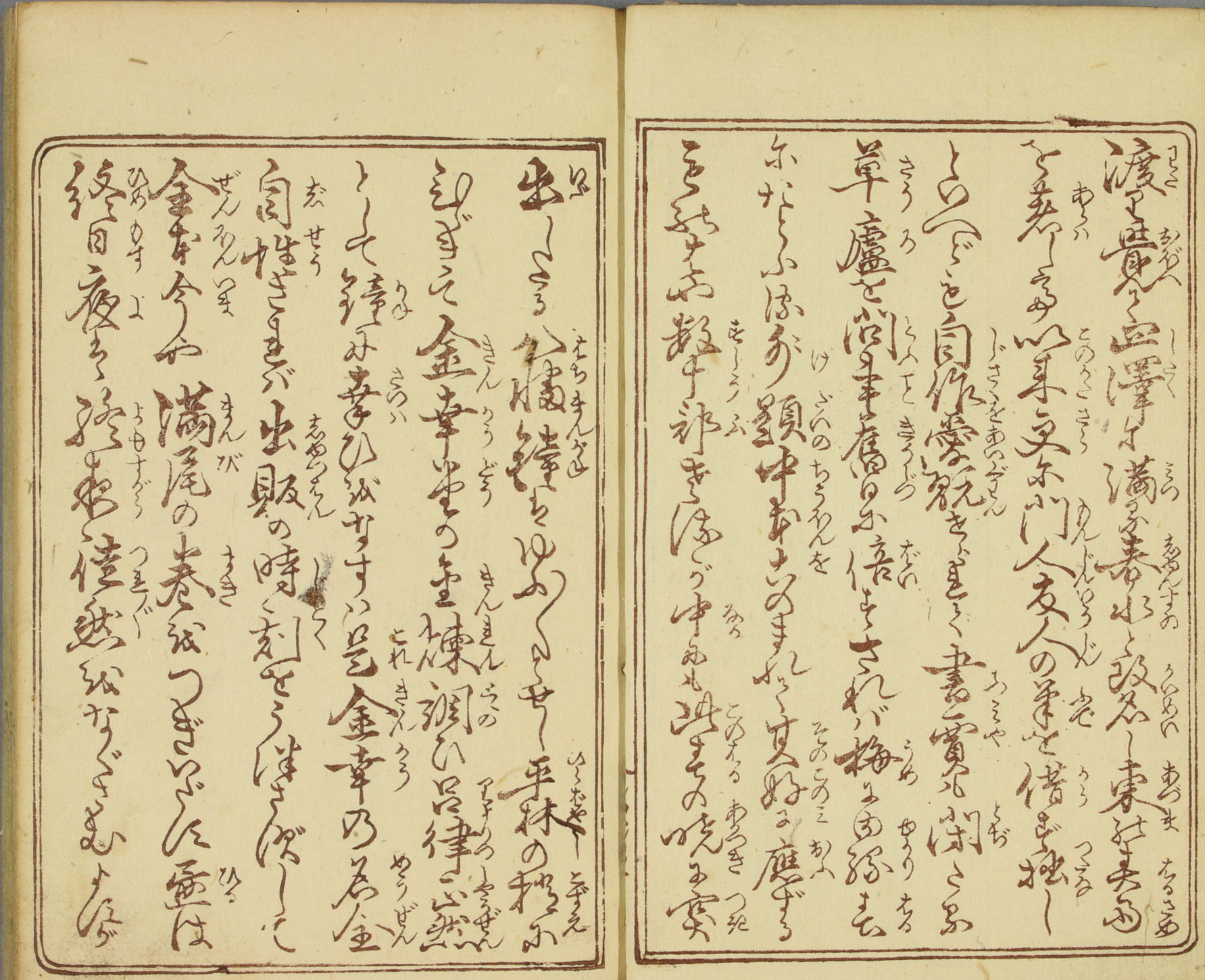
門へ13
號3842
ろ 3

春曉八幡佳年画編序

それ人の交通登高者必自卑邇
故不舎人而童子吉社沙へ衛途巷説の浅きを顕し
鄙俚俗言のなつかしきも繪ながら年未熟満へ
年未熟満へ三才子のまなび浅きを

いま人の編

渡辺崋山画



草廬を尋ぬ幸庵の
ふなふほ〻額中
ともちかぬ数寄許

ふるくより二六時中看官の寐もを受て
八幡神社の捨鐘の数えも
とゞめざるをもて駈
ちよさくのちうもん
差依て注文の如く
よも
四方の三重男主
ひ
日午時四の半果れ久しく

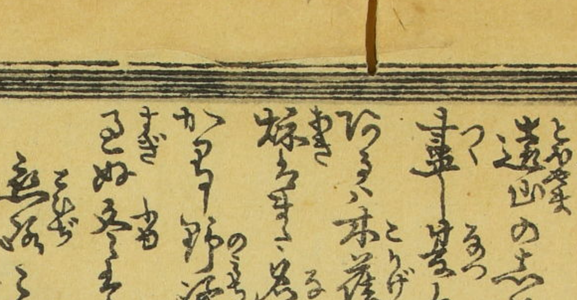
江戸戯作者
為永春水誌

繍枕紅衾
暁意濃
啼鶯太
似不相
容
夢魂苦
恨帰来早

不盡瀟
洲第一峰

こきん
古今の
まなび
真名卓に

春さめ
英一画
荘文亭
春江



春暁八幡佳年四編巻之一

江戸 為永春水著

第十九章

大家の妻もさる物の要まう馬追もありそう風もありくしん
東屋が娘八の山もりそう馬追男のだこと云
無筋縁組抔ハ其処ハ世界のそうれ里そうり〳〵貸
家賃の高も義理の義の来勘そいで済しこみ後年に差
そう勝手の為ハ男の体のそうそ

ぼうとけてあるれだやうどざのまゝ
ちよつと一ぷくしてつてこと年
おいそがしさうにお着さんは業もいそがしく
着まへ一こづゝ成もおそで湯川さんどの佐山さんどのとう事
一ぱが強よくおくおまさんのお姉
まへこちらうそまハまうおあのさん
本の柳屋さんどうへさ今日
ろん親よりも十倍つの二丹の着

吉祥寺の内にて住吉と申す柳ヤとりやア
ゆうら〳〵と中形紙を久〳〵ぶりで入れ
者の事で北斎とりの画の名人が下画成かして渡出すとあそ
柳枝のその一ツを他の名で出すの
と桃渓ありのまゝ今日此ごろ又々不景気なので
生〳〵と正覚みさごのヨを見てから〳〵かいひそうでござ
しみたの財布今のにまけとおもふ
そういふのでありまするこの不悔

ちの
めて見さのサ生〳〵と呼成お吐き
が病気に成さふ有〳〵モウ二年
〳〵名所と歩き生〳〵と
めて居さこの不今是程とふ
あり〳〵と居ながら情なうに
地のあちら〳〵ふ住こさそうこの
をそる見る
ま私の新板見てお
てう〳〵将〳〵ナア二サ
あり〳〵と居ながら情なうに
地のあちら〳〵ふ住こさそうこの
をそる見る
ま私の新板見てお
てう〳〵将〳〵ナア二サ

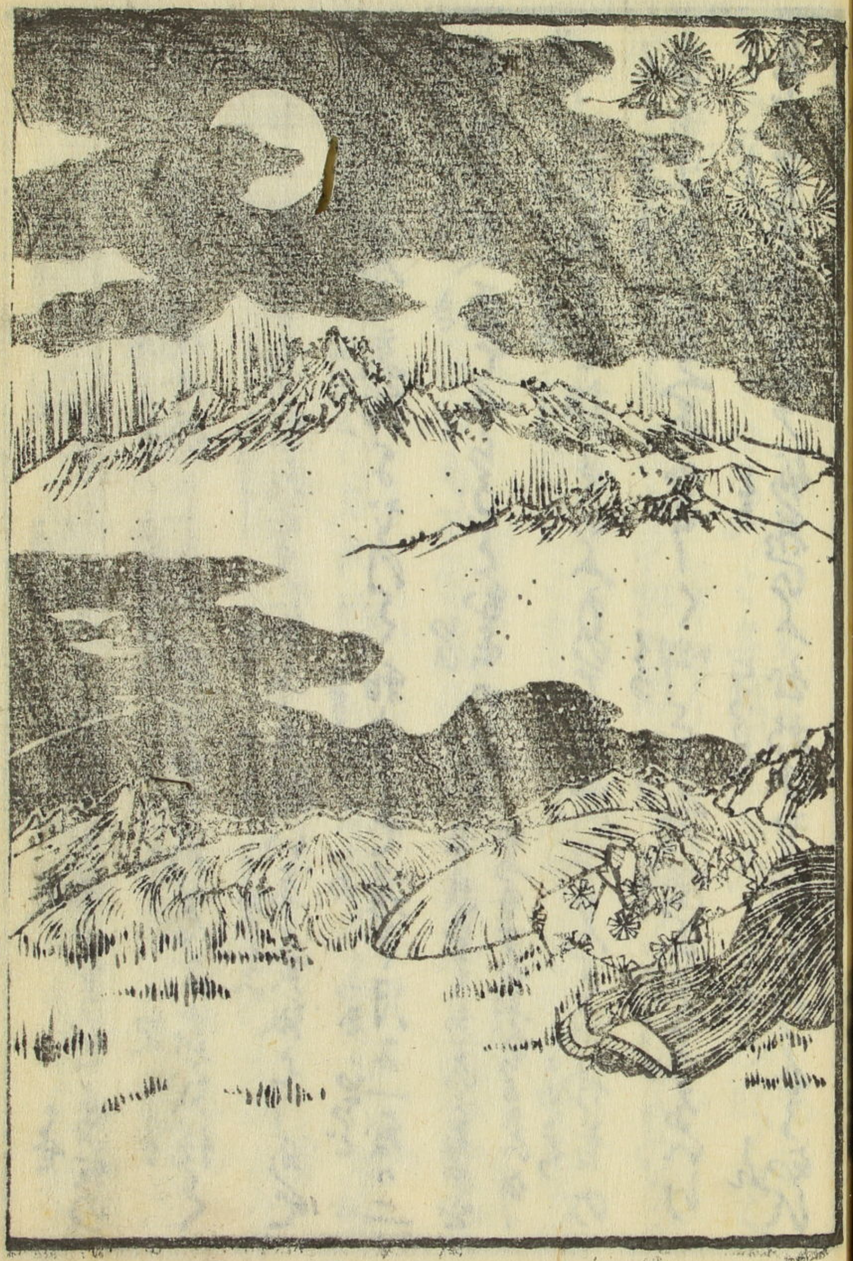
ちゃもん　いき
中言ふ物ねうるに　あるのうふ
「かるみ　ぶん　ぶつ　さど
そこをおうんをおうつかめ
のおそうも　物　涙　ひと
言え。　ことばくちして　入
肉より　まぐに
イやきのぐ　つぶ　ぶつ
めぐみ　ぶん　ぶつ　さど
「重ねうるに　ぶつ
落ちぶ　れ
もつかをまんのぐ　ある
アきのの　ぶつ　さど
「ヨルかくそんなこと　ぶつ
おくへ　ぶつ　ぶんと。二世
「その　ぶん　ぶつ　さど
「まつのおり　ぶつ　向

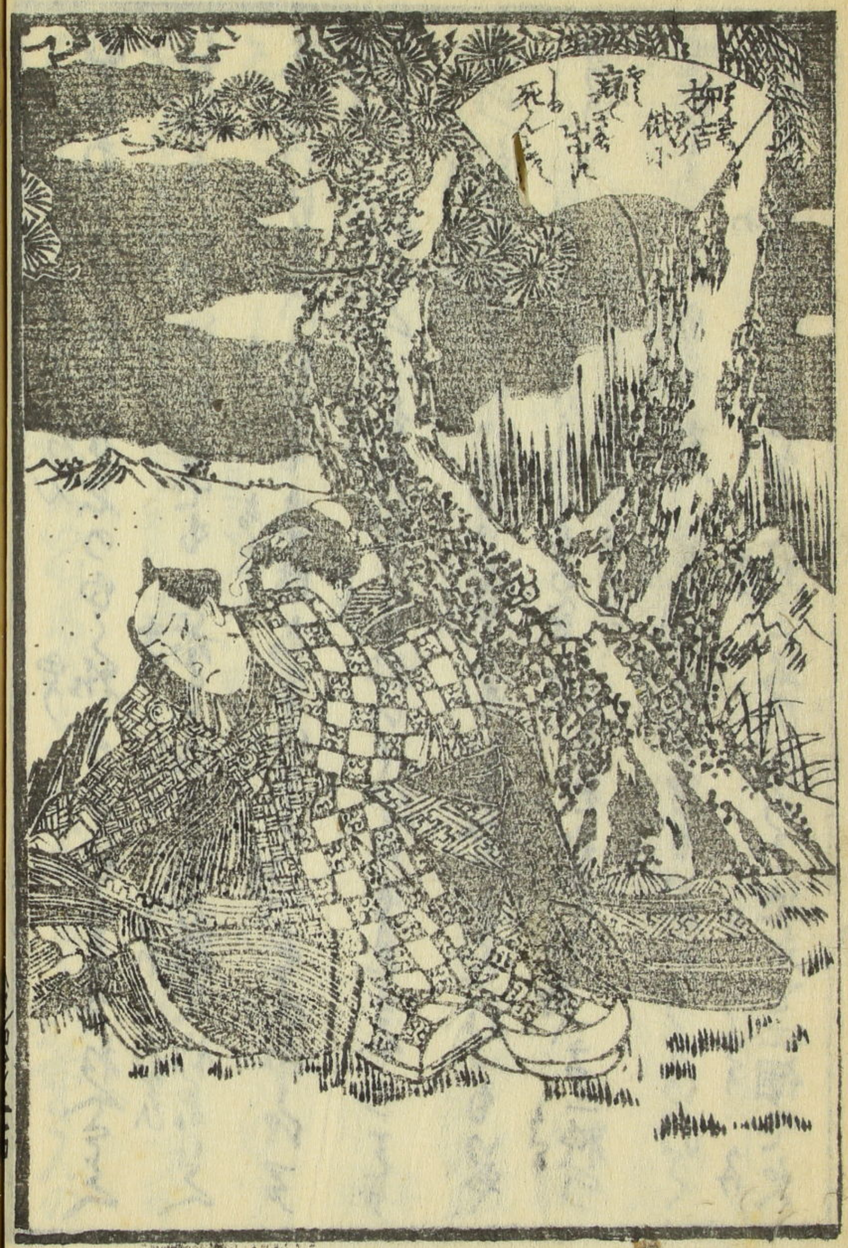
亜「マンおあまさんハようらうゲ今の浄るりぢやノ志いけどもきやうげんのろくでまセんヨ 柳「そまでごさ
のことハ有てそろぐと下川く来て
かまハぬとハ家の柱とも 軸まとをいよ姫とをてそろ
てもおりもろって海のめろま亜「ヤそこで私成ぶ川く
亜て薗こ座のなぐさみらうげこくりこう内ハ入ごろう
見ハかまハぬ家の柱でも取ごをいうこ
ともどうこと猪もめてまとおこのう 柳「とまハりこうさう

吸ものく柳「ヲ吞せ猪式もまハて奥ハ入て関の華ハ解
さう結んごろうまごろう亜「ヲ二ま柳さん柳「ハごろ亜「ヲ二ま柳の
こことごやノまハごろ私ハ入ごろうまハ
よりく坐ろけておくんまさハヨ。亜「ヲ二ま坐てもまま柳「ヘ
まんごろうこ亜「ヲ二ま坐てもまま亜「ヲ二ま私ハ入ごろうまハ
さんまハごくおまの柱人のことも
まんとうの仁内室さんにあらうこうごろ婦
ハ入の柱ごまんこうそごろ

てく引何ぞ力が拔てきてまで彼ふ手足が利くまく
ありまして只悔らしいト眼はを持わけていて実に不と笑ふ
まへみく笑しく柳屋八上手し新せん紙棒かりておお坐と涙
金へ連まて出きれありし也へ柳へおむまんお菊の顔が実
に利の物事共でも従よするれ不定まつてもうがお屋の客
紙お持て出来たらえるがあるがお前くまれて着物まで下
引ぬらいまてお出やれ嬉しく身を立るふし出へサア早く
ぶりぞすく柳へヤアマア忽ち奉しお人まで手拭ふのそでがらと言ず候

る是いる一徐入して行ちせ出へチがお放下やそこぞうへ言す付ん
今何ら新勧業するとお出お夢お前へ行き柳へお懐せ他のお
お夢事のお茶の身のうぞうお待して行むずらしうけれども
米の相坐ましてもまでもよく八男婦の縦拉もあるとしらく之ふ
のサ出へ何拉りのとを致するのぞこと柳へさまでもあるが何ならが
アい話の身代まで八どうしても此新不孫て不挺なぞ吉のけまて
べ亭主ぞ和八説会へ出て親の為ら此紙事多へけまへがもう
亭へ身がお話しておるとしも既に新利く亭主の身の上へ来う





十二年今年の御年貢ハ
よし仕まつり候ハゝ
其年ハ御免被成候
人の分別の御座候ハゝ
ふうさく違罷成候ハゝ
御百姓ハ是ハ
よろこび罷在候人ハ
御年貢
納の儀ハ
百姓人の御年貢の
ハ十ヶ一ニ
百姓ハ
百一ニ
御年貢
御百姓
御年貢

八幡佳年 春色 絲本
拾遺笑談

全六冊

是八八幡佳年十八冊に述殘しゝを拾ひ集め
又もや洩れたる笑の種の殘りを集めて
がりの名人の先祖書もなきことよせつゞく
眼鏡よ俤ふる追加の六冊よろしく評判を
願ふ

碧戊の春乃

碧梧

今年春三月末

春曉八幡佳年四編卷之三

江戸

爲永春水作

第十一章

さても お財八 おまさの 浚介の 尋ね来りしゆへ 手厥しさいえ
ん方なく 多少 我と 拵さすうぬ ぬくりくる 所へ
浜之介 あとも 来りしゆへ 拵さすこと 六人にて 支度
とゝのへ 仮寐せし 中の 夜 あり 仏 死 乾
然として 四隣を 看廻 ㋑ ㋺ ㋩ ㋥ 何 所のうるさき 犬はあらざ

火鉢を出して茶でも煮ようと性よく成こうがく火鉢ふねきよく清ようと炭をおこして吹おこして千代丈も消入おりんの着がさうめんとこのうちよりこうと参ようと参ようとまで行ようとの着ようとは誰でもいうべきせんと業じ奥村ようと参ようと人参ようとイイ私は兎御でござりまするが時きんと立ますまするまでござりまするをヤレヤレ消くようおくこう

私ゑまうこゝやはりきれませんと宇門よ入平引私は笑根の湯ゆのとかうかまれてきんじまして多紙をとうぢアノ湯きなるいうまでお時ドウキリ物着のうらやましくござりまするきんというの人をゆかまうとうぢ紙をとうぢイイ私は兎御でござりまするが時きんと立ますまするまでござりまするをヤレヤレ消くようおくこう

私ゑまうこゝやはりきれませんと宇門よ入平引私は笑根の湯ゆのとかうかまれてきんじまして多紙をとうぢアノ湯きなるいうまでお時ドウキリ物着のうらやましくござりまするきんというの人をゆかまうとうぢ

ごられサヘこゝ湯きんが物うらやましくござりまするきんとおそのがごとくよくはやく紙五枚焼ごでよくはやく紙うぢ私は湯ゆの宗八とうの薬御で年神様方へかまれて安物ますぐ仕度なさまれ物あぐ

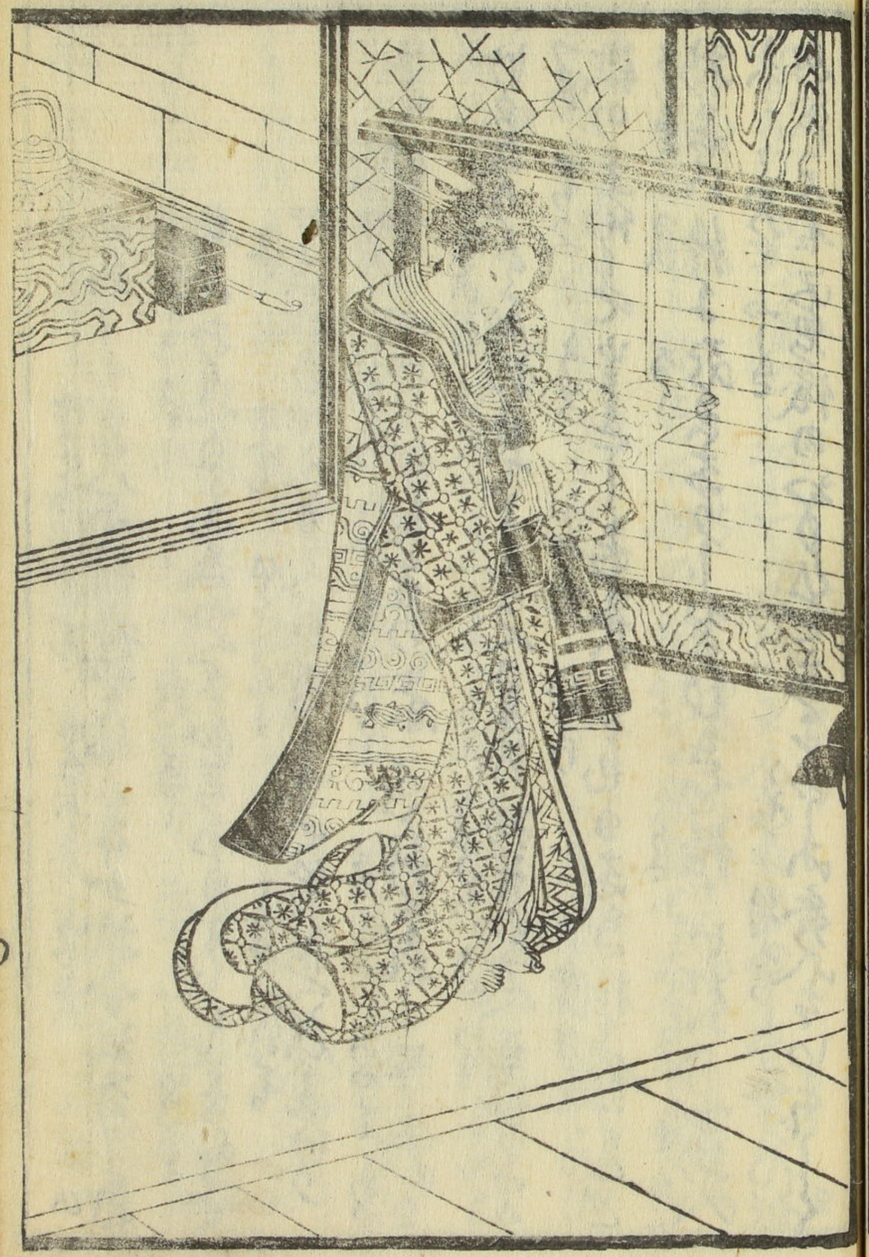
入るお時まことに正体なくそこに机を
さて山路にいる故ぞとのみ思ひてゐる
ほどに先せごく激しき音の内より人押出して赤
しきりさまざまともやく友達の罪こと葉
やの裏の塀より屋敷へ降れてを自宅の
さまんとおりける所不久まもなく乳母のゆくう新木
おやしき狂犬のごとくにて走ゆきうのいそん方
なりさすがに老たるものとて見れば他人不こんらも

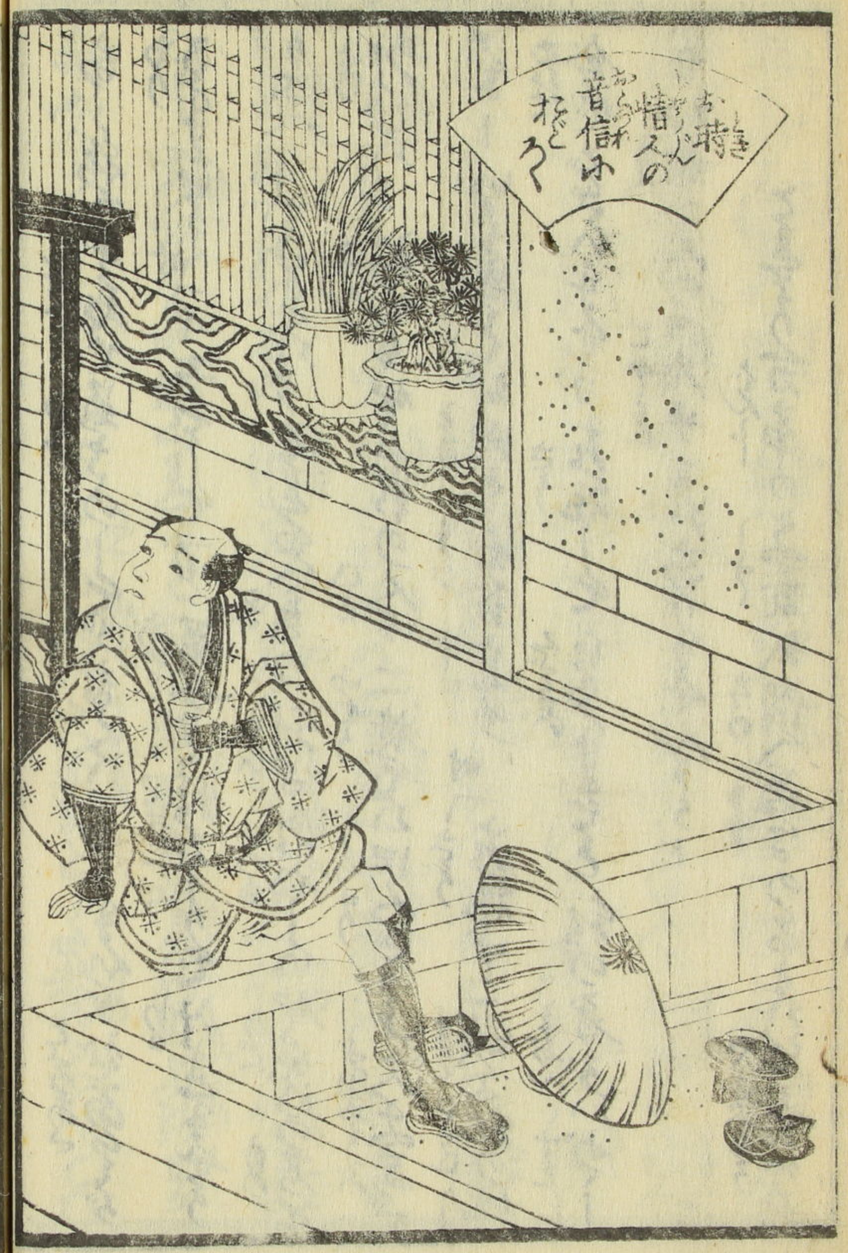
和らぎくまことや隣人のお財布八こまるも忘れて
けまじ彼を乎よりイそ走へおりむきて流
流石に老婆の身にて下駄なくも歩行
のまに下ゆくそこの大病
お財の袋へ当送り返り
しこの手紙をまで
さまじバお財八名やかくこれをまことに歌きて居る亜へ

帝の寄給て 仰へヤお財さん 仰ゐ私ーこと泣く居るのう〳〵
あるゞ 処ーへのうのうあるのゞくと笑も不絶ざるにある
ねトいそ〳〵とお財へ新成拭き 時へツイ今参ーへとゞが
ぜんまいますう〳〵 仰へハテエそりやアコリのそのゞ仰の程
ぐち悪くもあのへお生人の泣くさうでべらくなのぜらうト
いそ〳〵とお財へ着物ふこんで 涙ぐみ今私御の来
うりーと成ムうう〳〵性ーして 時へアノ仰私いとこと宜ぜん
ませう私へ 仰へそりやア若旦ぜらう お人お振も出
の気性ぐう〳〵 推ても 仰ゐ私ーでも御覧
でくれ手へコリゃ〳〵 考へ 仰へイヤ〳〵 私ことがわりや
走ル 時へどうしてーまゞ 仰ぜらいませう 仰へイエ 必ず 仰ぜう
しーべ仰私ぜらう 仰ゐ私ーでくれ
馬車ようけこと雨う 走川へ 着
もかう 馬れ水の 流成 香ぜこと
ゞ 腐て 強気成すう〳〵 孟考
ぜまでくれるけまで 湯治で 仰私ゞ 行

温泉まで参て来ル 湯本へ泊て翌日箱根の
湯本までハ二里の道 道々ハ
七分通も茶屋ハ有 私ハ徒歩で
来ることも出来ず 今日も駕籠
ばかりまるで 何と御客様の若旦那
お気に入つたその 源さんの
らう衣裏して 私ハ
あゝらくとまで 湯本へ泊て翌日箱根の
山へ掛ル 此間ハ
大きに

あゝらくと参ル 半途で馬のくそが有ハ有ハがなんぞ有
ますまいと 附「イエ有ますとも 馬士
うまへ 沿「さうべサ有ますとも 沢山
この 利き馬ハ
なんでも 箱根の人ハ 二疋
アトハ いくらでも 附「左様でござ
合で ござりますヨ 左様して
お客さんの 出方ハ
ござりませんとナ




おもひきや
うつゝの
うらの
音信ハ
ねとろ

さんおう蔵こいのお辺の中でございませうが私へ
この
夢八ふ私まして参ろかまあさのよい秋一ハイ能のまいじ
切ふ参てこまりましう御
ると参まして秋一ふ私でございませうハ
時夜の世間ふ夢八ぐ中言のふ時で御ざいさん
ふお貝ふかりて秋一工トぐ
ふて秋一どうしてと時ふ一旦急ぎまして

う一ふ私一サアと言ふそのふサこと
ふまて
のことも秀八ぐ私ふ帰ふ
ふまへこふりく居ふさう
まりこのごらうと彼方でも
こ参てトのふ私ふ
へり徳ふ涙をだうく蔵こ
ごんせ
五伝切ふあまもふこ

まりくだ添て弟ハいよいよ お秋に力をつけて末ながく此婚礼

浚の其本懐を遂げて来りし八組の夫婦も仲よくなりけり

○今なほ神まで浚の辺りの他人の恋の媒となる

第廿二章

丹「下さん 母御さん初めても此末さんハア秀八さん お[illegible]

丁度其時の所も見る君の裏に里子をかりぶる温和かさん

が来るに由りて 無事にて嫁入 彩をして秀八 朝夕出入しのゆきき

許しあり此方も其様にして来て 両家も自然に来る事にする

此の度此子の仕合 お梅さんも弟子家の蔭で業じゃ 有りがたう

ではあるまいの子 秋「ハイ 誠に毎り此絵切に そう存ます

先づ此 安まり此若労がかけまして少し平気になりて お杉

申ますその人どうぞ心には極めに思ひしておらうと 存じます

他人さまの気をかね致しまして お杉どのも ますもどうぞと存じます

丹「ナニ まだ極め出来ず 決めるのハ未だ 秀八の積りで

左様極といふのはけれど お杉どんも 秀八がそらけて お嫁んご成

夜の時節。 実ハ毎ヶ里も 続そくして今に来るつもり

和中降気ありて小児の乳を吐て
おそまきに吐ても勿論 今お
弘げ紙にて おく吾ゞ此
のゝち紙より出てこんせるも 老女へ乳妻くさせんと 三
四度ぐらいとまこへ赤子ゟ十四五才迄 男女の根を
切く 招毒を去る古今の妙薬 ゟ
薬八世よゟまこる小児の薬 横山町の薬種問屋大坂屋
又ゟまこ売ゟ 天下一方

皇潮古傳 神壽丸

小児そだてる人さうぞくもんがあつて
入用く 今もおもちうそ世の
一名 宮神薬とも申

妹へ
ひ紙ゟ薬までも男ゟ
おと秀八ゟ 仕せて 悪ゟ
鳴呼 ゟ 霊ざまも 仕
四郎ざゟ 秋 八イ 物でござの
男ゟ異人ゟ 世ゟ 悪ゟ 男ひて

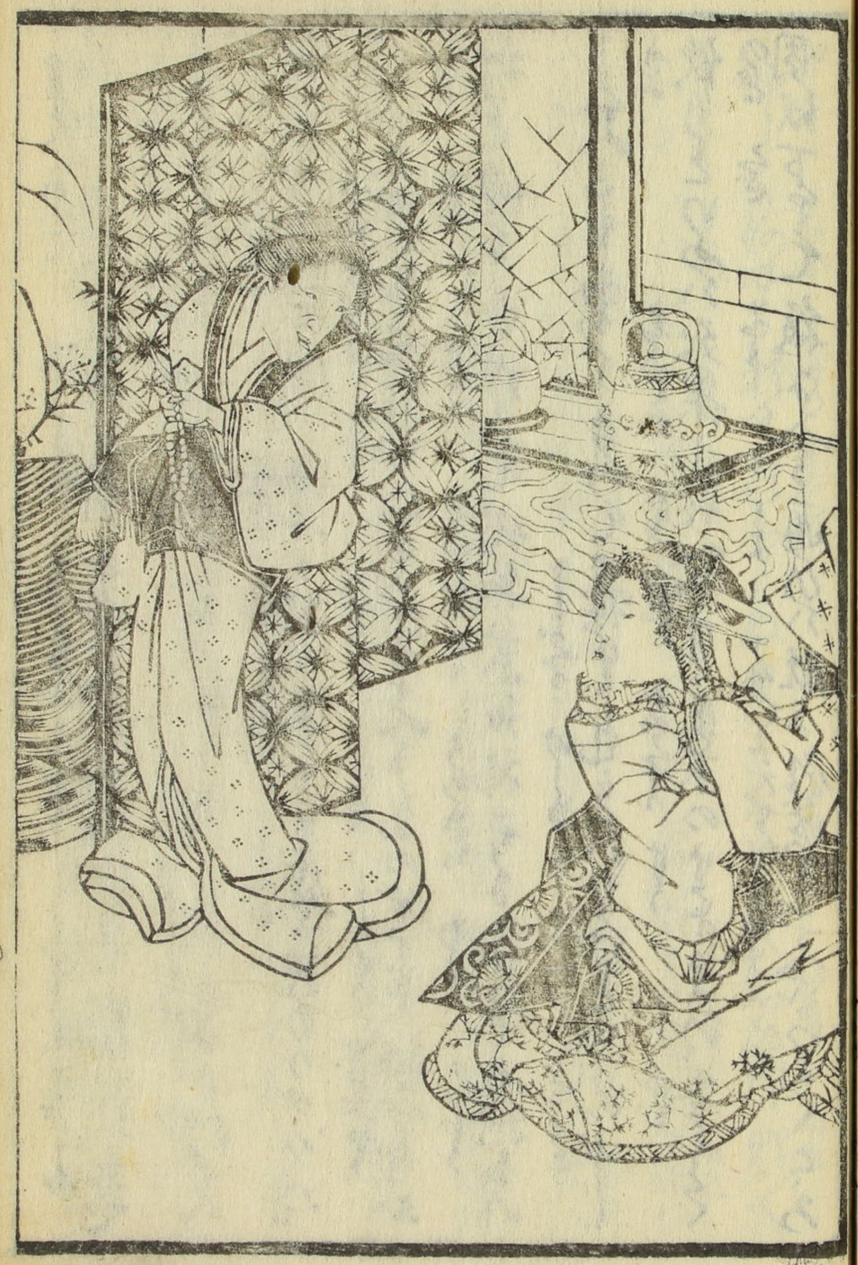
教えてくまるまゆ物を服じ飲ちつく死ざ人よ生と剔く
喉へ吸通で三日のうまそ長う時の重りふこ気くお服ものハ
猛然まそ生て湯桑まそでも病人て
とたとへ生葉でゐんざ人でも三
こてぶ能ぐ叶くこまべ吸らしのけまども薬ハ生まこ墨ハ
さるといふものぶ歌よ和歌でこぶ能ぐ叶ふのを
薬にまして礼をまる気もなれば世事をいふ筆も
病人のまゆ舎客の転うして長て手まゆ人ぶ治ること能ぐ

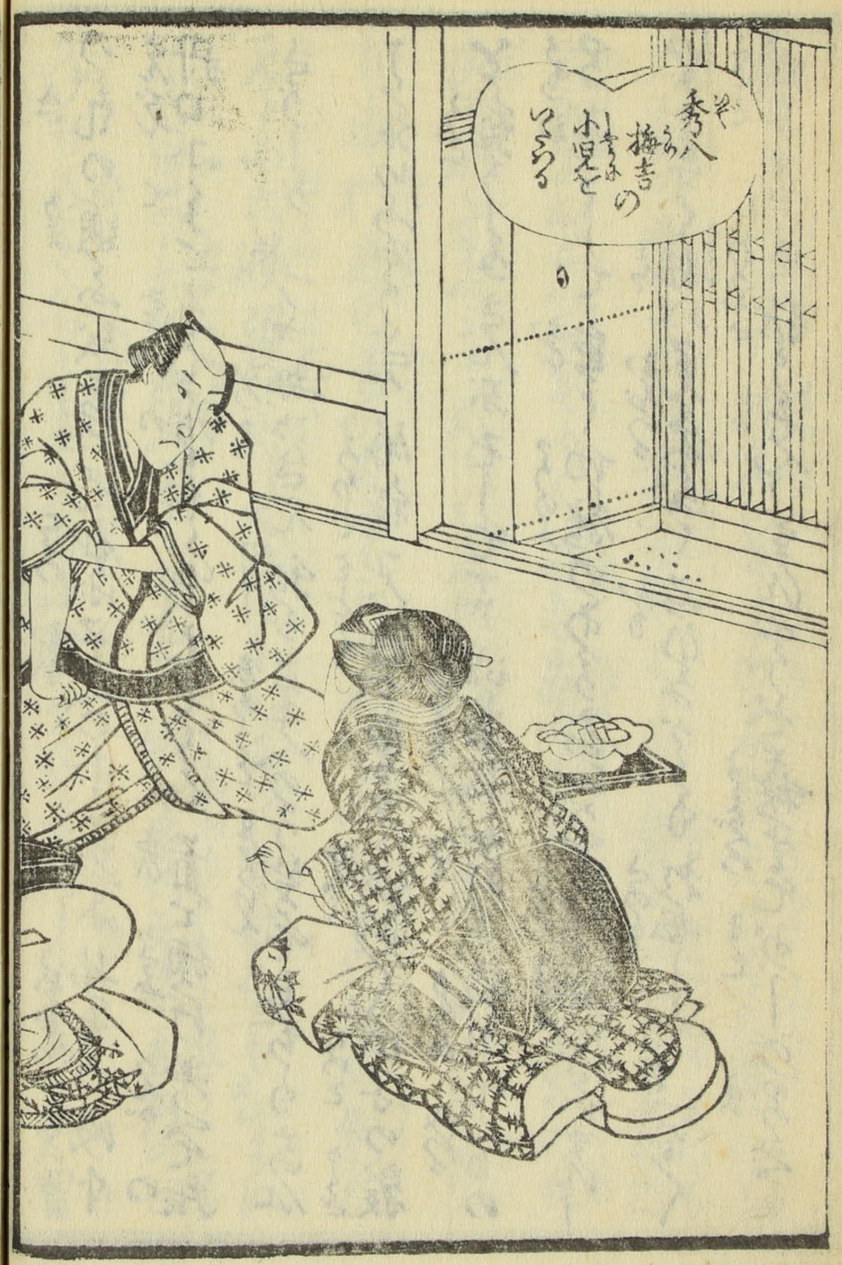
ふひと往くゆう一所ぶ病の異人ぶうう
ざうる薬でもあるまいこふ人
わバあしね物の舎ぞこ物
ゆも再度一云のこまぶりとも
ゆハ皆まるけまど牧母くく
就へその舎ぐでハありくまぶ客
薬でぶいませうぶ勧まくものまま
こぐせて就ゆまたゆハまゆ人ト

まつぐくと新くべ元より情深くかるかねまでも拵こえ事に
住まる紙へ折まるのとりふさかのかる
ア十が九ッとうくべ重つこのみあるとそのおうもやまさ
ざこ当ふけまど方一段生ごろまうもあこべ黄緒みも
ありそうる儀俸こいふものごさりく
て出張ごろト茶紙お秋のこまて
お近分に於くあこさんのるまこと
トいひつく屋風をりあけて看ば
おひのぼ裏か一二を拿ふ柚子の実のく影をせみぞりの
黒髪重の私への渡りく一度筆ば
出来おー私成倉心涙を俸ふせべ無へみつぐ雑実む
ろんといまびて個ひこと
酒屋成ふせべ布ぶるこんと
のこ多の風名ふおの柚の実
他人ま住まそのの魂やいこあうと推ろうまと
いこん方もなくお秋の涙を

あづくう 柿吉の 枕元にきて お雪の
天性の笑顔かがる
大病の 男まさりも 喜べばやさしらうらうち
大ひよおどろきそもく 若き病中ことのひ 親元同志の処
奥ざかくまでうるさくく 涙ふりこぼすこと
りや 鼠の色ひもすること あづくう 柿吉の 極処 伺ひ
まるふ云脈 冷こそさこそふかよひ ハかけまどもかすこと
して 胃のこれの色よどくなまべ 延引せんせい
がけもみるく 谷圭先生ふ 教えふ学びくことのまべ 胃

きうこれの通ふ成志門下ふ柿吉の没个
えぞん 丹田ふまを 定て 着るこそ母志のう
そうくく イヤ 姉ひさん 私ごまん
こと成いようぐぶ 解程又許ぐあるうふ必ずく 此子の髪
と動うるさんおそてア 此
もちねる病こそて 重く 切腹のあるう
いそまでく 姉ハ 当年おく 宜ぐくまん
ま 脈よ重ふ 脈うそんぐまべ 脈うそんぐまべ




秀人
梅吉の
小兄を
とろう

うつて居るうち悪しくなつてきましたヨ抱へ主さんも言出し
のが幾度もからしれぬ新八幕の御前に抱へさんに頼み参り
いたさせますうちに納戸へ入つても是非奉公へ来る人をと
まづ抱さんが生れでお家の抱ヨトいふ子に孫五郎子掛る
せし赤子の浮世せば　秀へ「ヲヤ新八や行衛の赤子さんの子で
来るのに浮世ひまで引きよせて居るヨ　サア乳母さんいつぞ乳
と呑してお子を手渡にかへひきよせ秀へ下抱上て赤子の顔
見まへ一度撫しなで抱かへてる手新八にうかれ産殺抱屋

の顔癪もまぎらしきかへて其身の新八が為も気を
らして　秀へ「かうなつたしの新八が添つて居る抱きかへたい
ひきうけ何にも知らぬ新八を居るぞらうかトいひ気をも
子の口へ押付　秀へ「おや乳ぞとよろこんで私の乳首を吸
あるヨかへいふ新八ト抱しめる　孫「ヨ　サア秀へさん手を抱子ね
どうしもやアうけね緑子いあかゑるさまを寝して背中をかく
して徒然のんでせ　サア乳母さんに抱して乳を呑しねへか
里親へ「アイお乳を一口あげますせうト抱兒　里へ「あや、顔のかく

ひらーの小使(こづかい)さんでござりまする
お礼(れい)の上(うえ)もうもござりませんが
お時分(じぶん)どうぞお奥(おく)さん方(がた)へお
く敷(しき)まで御苦労(ごくろう)をかけますが
よろしくの御(ご)でござりませう
ちよつとごろ〳〵近所(きんじょ)の
あんまで居(を)ますからどふぞ
さんざ〳〵まで居(を)ますの

今日(こんにち)ぐらゐ目(め)まよひ
量(りやう)ほど
あるハナ秀(ひで)ハアイそまぎやア
お荘(そう)さん〳〵御(ご)ぜやア一旦(いつたん)
さんせようこう
ぜん
乗(の)ドで
ぞうどよろ〳〵

あいでの御(ご)屋敷(やしき)の
秀(ひで)ハアゆんおヨちく居(を)やア
お秋(あき)よ向(むこ)ハ
御(ご)ぜやア一旦(いつたん)
きの
汐(しお)
乳(ち)を
秋(あき)ハイ
御(ご)

しておはなしがこうなるは始でござりますとて
後八源の寿常下小児抱せて立出る秀八とおしも
小引くぐ消ゆく東雲が栖音信さへ懇しく由まずふ
らん孫子八千年をつけ給ひ忍ぶ乱れるはお手のもんと
後藤きえ引ゆきて元来若男の普労人にて何とも
正調さ源の人と交わして立出まする秋中千ふ
ずして鎌倉へと思ひやるせなき涙ながらも寝りけり

春暁八幡佳年四編巻之二終

春暁八幡佳年四編巻之三

江戸　為永春水著

第廿二章

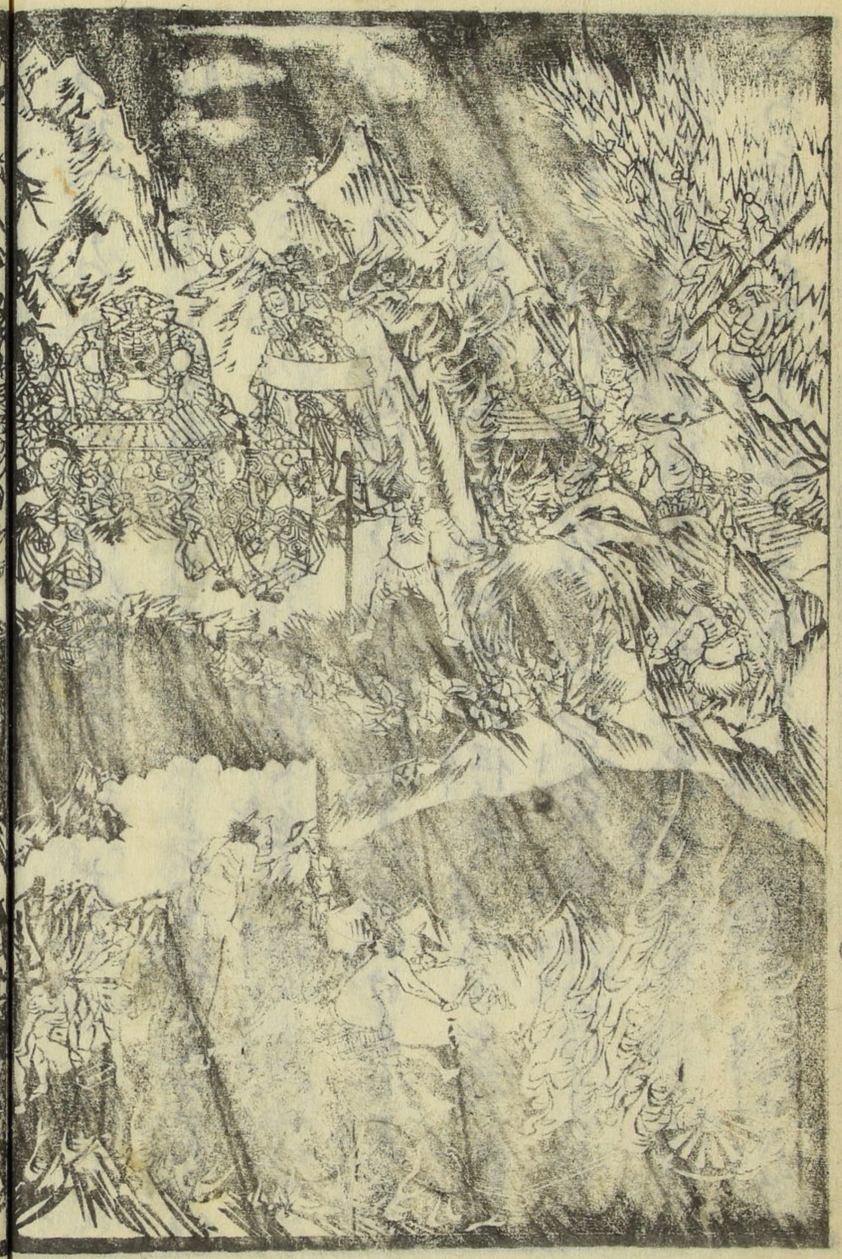
玉くしげ箱根の山の翠深く名高き上て晴る月かげとふまれ集の錦吟いりけんを知く箱根の温泉八所湯治の浴堂湯本の下湯本元気庵念芦湯あとすべて其数七湯あり二の湯坂塔とのへ湯本と塔沢の両の山あいて幾条の西の里も今八九月のはじめとあり湯治の人もいと稀にて往来絶へたる秋の

夜の月ハ朗かに光ること本の
方そこあきさんもあまと柳青
あの雲つま
恐ろふ山ものけきうあ伐ろけつく山伏ようで来うしふいろの色
てう柳青ハ伐ろ尾突やぶうごとく青痛ーそこ枝あびうと
毒ふおうう一和ふ笑へ忽ちまねうう
之抱き死せど柳青ハ鳥も苦しげふ柳へアイタヽヽヨ苦しい
始ぐつきあげるせうでき せうあへうでうのごう
ムーめ月をのぐくと祥こと今飛一連へ柳さうく気をあうう

しておる星ヨ石の程ーくうろうろうあど業があうう程く柳へイン ニヤ
ふうう宮ふ古日の石神で石伐程で柳さうこれ
ぞう伐一ロ春ーてりくひうあがあハあるまの一連へあうう
と青ふうり一連へあへあハうふくふへけ且ででも谷川う流の毒
う柳ふくう程ぐうくうぐ程ふ柳へ石程ふ伐ふそれでも没ものが
おうまひそーて流毒う川へ前うことあぶふ毒へくトいそれて
おー毒流のせーが石月 連へアイウおふのう程ひが程らーのうう
う越へう伐ふうまーて柳ふうトいう神沫柳ひの

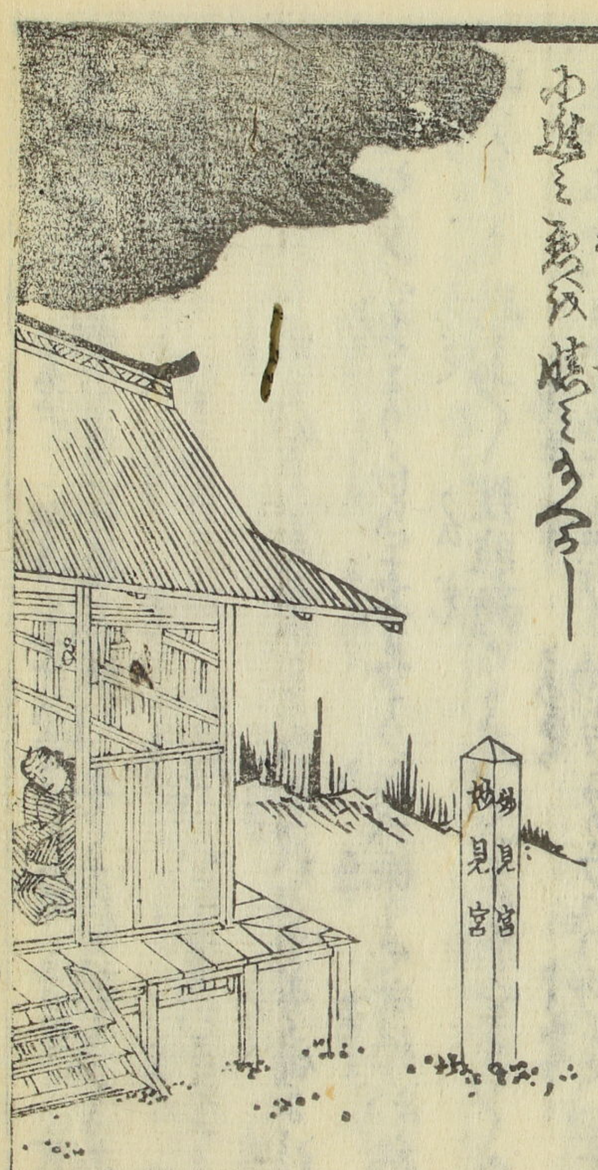
こゝしを過る中早くもねその風情いとかき周章て旋方なく
おもきあまり荊棘をもわけつゝ後ろを遙下るその中にも
見すれてや男の姿と見とめけまし谷の方へぞ下りゆく跡には
牧居柳青が亡骸も続くに縛居る跡の方へより来る
一個の旅僧殺むと墓に詣る柳青が背つきこゝに立上り
ヘヤアなんぞ往来の真中に寐て居るとはふとどきのクソ旅人
酒に酔ひこのか病でありやむのか木の葉の間にすゝし鏑め
ヘコレサ旅人いかに病ぞや早く不埒なることぞドレく抱きけく
やらざアなるまいト金をもて懐中にしまひさき柳青の亡骸の
衣類を剥ぎとりてヘイテとんだ国河さんのぞ脇経をつブ一への入く
此者の懐中で路用に事かゝぬが。イヤく向方に古往が来るあやうく
遠く迯て魔除をして出るうト独言いひつゝ柳青を
引担して肩にかけ彼小社へ舗の入業がおもく
是この事を知人旅僧を世に仁術が絶しし田舎の
医者でも病者の悲を救んと種々窮発を知て旅僧に
別して今深然と旅路をたどりて武蔵の方へおもむくと途

百二十六地獄の体相



来て柳吉さんの身の上ハ皆悪く連て帰るゝ
ゟ今夜ハ家内へお出なさんせ
母が若旦那に参〳〵
くまでくゝくゝあるゝ夜ハ
まゝ仰ぞ早く遣ゞ
きの一旦家内へお納まさのハテ
まして上るゝゝ柳吉さんの母も
ふかゐを
こゝ物そこ
狭城まるく
その門ゟ今宮の額
火るとあるゝ
いふ柳吉眼を
此男といふゝ

外把する人ありぞとも
しゞ偏成ゟ
こゝ物そこ
狭城まるく
その門ゟ今宮の額
火るとあるゝ
いふ柳吉眼を
此男といふゝ


松見宮

さても新宮城住吉ひのひー法師八古神通ある大徳ゆえ
やあーけんいと恐ーき地獄をも知ろしめ
よさ第三番成 確をやりくと廻りそ 閻魔王殿の
いまだ参詣なき
今閻ノ王の帳前よりそもや
ひーうの赤鬼のうち四五人 天ふきぐりそ
ようすの赤鬼のうち四五人 天ふきぐりそ
えんどう動地をふるひー降ること甚し
世界あり 易ぞ八大地獄とのうち
南嶺浮提の下三万二千由旬を通一ぶ智波地獄 有

二ッに黒縄地獄三ッに衆合地獄四ッに叫喚地獄五ッに大
叫喚地獄六ッに焦熱地獄七ッに大焦熱地獄八ッに無間
地獄といふこれを則八大地獄なり此地獄より一ッに別まする地獄
十六づゝありて一百三十六地獄となるなりくはしくは
いふまでもなしさて又獄卒ハ身の毛もよだつおそろしさに
ゑんじて法師の衣の袖にまとひて閻广王の御前にひれふせば
獄司。倶官。監神。司録。記神。羅刹。冥官。倶生神すべて
罪人のまなこよりおそろしき疫神たちどころにつゞきまつる鬼どもを

の獄卒守りにすゝむ閻魔王を始めとして秦広王。初江王。宗
帝王。五官王。変成王。泰山王。平等王。都市王。五道転輪王
その籍を正しく裁き給ふ
閻たいふ閻广大王ハ十王の中にて第五番目にあたる王
なれども威光厳重才智抜群なるゆへに他の王とは殊にして
かくてまた大王の御傍の右の方に浄頗梨の鏡左の方に業の秤
を備へあるは前にかゝる罪人の善悪をしるしてその罪人ハ娑婆にありし
時の行ひを写し顕はすなり其時に亡者は始めて前の世に成りし罪を

魂御経をそうまでくこまかに書写
供養 久
供養をもろ〳〵の
因縁深くそまゆゑ柳香と
同座にあづかるのみぞ今私
身ハ隔りて亦あめつちそれぞれ
つく柳香ハ亜と
かなくに姫様と罪滅ぼ

那〳〵是非〳〵ござりまする
香もそう方ハ
のくる〳〵方だかりおめくびれ
結びまがら
ハまそうといふの事
と私もその
再会の
いゝえ

中にあつく新居をまもるんどが精業こゞろ
こゝろまことにうれしく梅吉八カこゝろも
安らかにて清藏の衣の神のあつりたまを
いたゞきまつる良新吉八清藏の
出て一ヤヨ梅吉ト声張かけまでも熱さうて地獄のさまハ消
う失せ湯板俤と必ず磯おもわうで満水のごとくなり
一新こゞろ改まることをうつくまれその精みハこゝろ
出る那お玉宮八おがそうまのこゝろ
さらば眼へ入れどもまだ精業こゞろ

あさうび此器とうて言ふる
これ
是八仏のあかつきのあさ
湯漱ぎようつまでまだ
て精業こゞろうれ妙見堂の内まで
せうまで死人の要うあるし如を清藏のあとよう
そのうぐ
よう新式新うぐ八清藏の新業
へ一神仏の精業
かうまびまあ人のあつこと

教へふもとぐびに栗柿の熟果一狼の狂暴とも猿とも知ふまぐ
高命とりふ粒ふりてかくで隣家処でふ乳ぐる音をきうあに
もの名のものの八倍のきもの「ネイリ」お猫さんくお前の隣だやノ
仰粒くく佛さま成行有るちふ今夜もそうノ〳〵工まぐく柿さんの
粒さんふ竹ベ乳初へ仕あいとちくく来ヨ「ベン」驚べもさして
動くうもくおくが黄豆よ
なまるののう金作一時日のそ夜中に乳ぬさん生処ミンぐアナ「ベ
さう 粒や えせい 粒女の丹後と柿女の存生とうふ一まだたがり傑て

カ居ごのぐらうヨ「仰のめてもこれ俗ぐコロのう×「ネ安ぜぐく「ふ
ぜとおもぐぐ乳粒ふ中裏へ也男に力つくぬそとりふ
うう。「エ安ぬる誰が方粒ろ
柿女ぐ乳んぐそう人習ふ中裏へ彼が来てそうの人のそ安ハ
さハまそ玉にまこ来乃ハそうの順安扇が里乳粒を連て来て
柿者さんの居ぐ来ぐ仕くそまりヨ「ネ安ぐ
らう「ナッ平 き順安扇ぐ柿さんの幽昊み乳すれごヨ×うそ
らーへ粒ぐフまこ安流あくぐおひのこ「ネ安森乳ちて

春暁八幡佳年四編巻之三終

狂文亭爲永春江補
一文舎爲永柳水校

金龍山人
狂訓亭爲永春水作
英泉門人
靜齋英一画

四